



タイムマシンの夜。

「え、アキラが支店長？ なんて？」
「なんではないやろ、なんでは」
一同、とっと笑った。どの顔も、懐かしかった。気ぜわしい年末気分に包まれたある週末、人生半世紀を生きたのを機に高校のクラス同窓会が開かれた。

大学から地元を離れ、そのまま東京で就職した。始めの頃は帰省の際、幾人かと連絡を取っていたが、それぞれ家庭を持つてからは次第に音沙汰がなくなり、今では同じく東京へ出て来ている一人二人と数年に一度会う程度だった。

「そーいやシンイチ、昔、2組のナオちゃんとき合っとなあ」
と遠い恋を振り返れば、でも今じゃタカオの嫁さんや、と思いい出を打ち砕き、「実は息子がグレかけてて…」

昨日も先生に頭下げてきたとこや」とため息をつけば、大丈夫お前もそうやった、と肩を叩いて慰め、

「えーと、誰やった？ 〆のことエックスエックス言うてた先生」と恩師を思い返しては、もう他界されたと知り、黙ってグラスを口に運ぶ。

昔話に、積もる話。肩書きなんてなかった頃の仲間。そこには、何の利害も打算もない。ただただ懐かしい時間。

時を忘れて話し込むと、みんな変わったようできて、あの頃のまゝ、まるで50歳の高校生だった。

「よお、オガワ、めっちゃくちや久しぶりやん、あつすまん、ビールこぼしてもうた」
あり、まったく…そそかしいヤツは、そそかしいまゝなのだ。(買ったばかりのジャケットが…)

ただ、32年という歳月にそれぞれが重ねてきた人としての年輪を、それぞれの佇まいがそれとなく物語っている。

「ところで、オガワくんは東京で何やってんの？」
「なんか洒落た格好してるけど」

さて、俺はいつたいてう見えているのか。

生き方を、包む。

D'URBAN

www.durban.jp

アザーストリーもWEBで公開中。 [生き方を包む](#)

Q